

## 乾燥地域の植物あれこれ<その7>

### ソドムのリンゴ

このシリーズの第7回目として「ソドムのリンゴ」を取り上げる。この植物は初期のAAIニュース第5号（1996年）「乾燥地の植物とその利用」で既に紹介した。学名は“*Calotropis procera*”で、アラブ首長国連邦では砂丘間低地やワジ沿いに極めて一般的に見られる。アラビア半島の乾燥地域にあっては比較的水条件に恵まれる時期が存在する場所の指標植物と考えられる。また、この植物は侵入植生の一つにも挙げられており、過剰耕作の指標ともされている。確かに、沙漠の耕作放棄地みたいな場所ではこの植物が目立っていた。



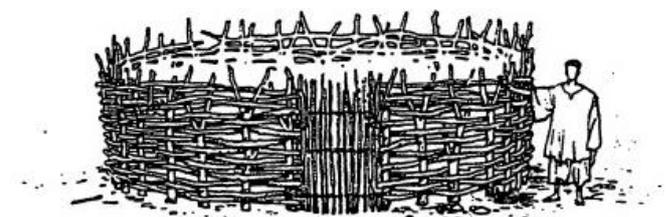
筆者がドバイで働いていた頃、日本からの研究者を案内しているときに、この植物が「ソドムのリンゴ」あるいは「死海トウワタ」という名前を持っていることを教えて頂いた。ソドムとは、旧約聖書『創世記』に出てくる死海沿岸の町のこと、ヤハウエの裁きによって滅ぼされた背徳の町とされている。この町と禁断の果実に擬せられるリンゴの名から、有毒の果実を結ぶいくつかの植物にこの名が用いられているようである。テレビドラマの「ソドムの林檎-ロトを殺した娘達」に出てくるツノナスもその一つである。

オマーン国の特にドファール地方でもこの植物が広く分布しており、都市部や村落周辺の道路際の荒地等で良く見かける。また、この植物のことは1988年に発行された「Plants of Dhofar」という書籍の中で下図に示すようなイラストと共に、利用についても詳しく解説されている。これによると、幹や枝に傷をつけると染み出て来るイチジ

クのように粘っこい乳液は毒性が強く、毒矢の材料として使われると同時に、家畜の皮膚病に対する薬としても使われるようである。さらに、この植物の茎から作った炭は、火薬の原料になるという記載もある。



特定非営利活動法人「サヘルの森」が初期に活動していたマリ国ファギビンヌ湖の周辺地域においても、旧湖底や砂丘の中のくぼ地など水条件が良さそうな場所に極めて一般的に生育が認められた。この地域では「トルシャ」と呼ばれているが、材も弱く、乳液も毒性があるので、一部の利用にとどまっているようであった。そんな中、プロジェクトは、この植物を未利用の資源としていろいろな目的に活用した。例えば、苗木を強風から守るために苗木を囲う垣根の材料としてトルシャの幹を利用した。下図のように円形に編み上げて作ったので、強度もあり、角が無いので壊れることも少なかった。また、繊維や綿毛の利用を女性の自立支援プロジェクトに結びようとする試みも行った。



この植物はアラビア半島や西アフリカ地域の住民達にとってそれ程重要視されていない。というか、あまり役に立たないからこそ資源の乏しい乾燥地でも採取圧がかからず、生き残れているとも考えられる。しかしながら、上記のようにいくつかの利用例もあり、さらに未だ明らかになっていない大きな価値を秘めているかも知れない。この植物を見ると、老荘思想における「無用の用」という言葉を思い浮かべてしまう。